デモ圃場の創意工夫 <その 5>

Step-up 型デモ圃場

JICA「北部ウガンダ生計向上支援プロジェクト(NUFLIP)」では、市場志向型の野菜栽培による農家の収入向上を図っており、ここではデモ圃場を活用した農家研修を実施している。

プロジェクトが対象としているのは小規模自給農家のグループである。彼らはトウモロコシやラッカセイ、ゴマといった畑作物を主に栽培しており、他にはワタやダイズなどの換金作物の栽培経験がある農家もいるが、いずれも粗放栽培で、販売を意識した野菜栽培の経験を有する農家はごく少数である。しかしながら野菜は畑作物よりも栽培に手間がかかるため、粗放栽培の経験しかない農家には、細やかな栽培管理を実践することは難しい。たとえプロジェクト実施中はできたとしても、その後の定着には高いハードルがある。

そこでプロジェクトは段階的に農家の自立を促す工夫をデモ圃場に組み込むことにした。ウガンダ北部には年二回の雨期があることから、まず第一雨期は栽培技術を習得することを目的とし、農家グループのメンバー全員でひとつのデモ圃場を管理する。メンバーはグループ研修において、講義で知識を学んだのち、デモ圃場で実習することで効率的に技術を習得することができる。また研修のない時もプロジェクトスタッフがこまめにモニタリングをして、生育状況に応じた栽培管理を丁寧に指導し、適時管理の重要性を理解してもらう。第二雨期は技術の実践である。メンバーを5~7 人のサブグループに分けて、各々でデモ圃場を設置してもらう。第一雨期と比べて圃場の数は5 倍以上になることから、プロジェクトがこまめに圃場を巡回することはできない。栽培管理は自分たちが第一雨期で学んだことを思い出しながら実施しなければならない。またモニタリング・栽培指導には普及員に主役になってもらい、プロジェクトはあくまでも一歩引いたサポート役の立場を取る。これにより農家には習得技術の実践経験を、普及員には技術指導の経験を積んでもらう。

また野菜栽培は種子、肥料、農薬などの農業資材にかかる費用が、畑作物と比べるとはるかに多い。しかしながら資金力に乏しい自給農家の中には、十分な資材が購入できず、栽培をあきらめる農家もいた。またそもそも農業生産にお金を投入するということ自体に慣れていない農家も多い。

そこで第一雨期のデモ圃場で使用する農業資材は実習教材として、すべてプロジェクトで用意する代わりに、得られる利益はすべて、第二雨期のためにとっておくように指導した。そして第二雨期では、プロジェクトは必要最低限の資材を準備するが、他に必要な資材は、第一雨期の売り上げを使って、農家が自分たちで購入しなければならない条件にした。これにより農家は自分で農業資材を購入し、使用するという経験を得ることになる。そして第二雨期で得られた利益は、翌年に各農家が自立して栽培するための資金にあてられるような仕組みとした。

今回のように粗放的な畑作経験しかない農家に集約的な野菜栽培技術を定着させるためには、技術普及と同時に、資金力の強化や営農の考え方まで変える必要があった。そのためには段階的に農家の能力向上が期待できる Step-up 型のデモ圃場が効果的に作用した。

Step1．グループで技術を学ぶ。売上は Step2 のために貯金。

Step2．習得した技術を少人数で実践。売上は自立のための資金。

Step3．各農家で自立して、野菜栽培を開始。